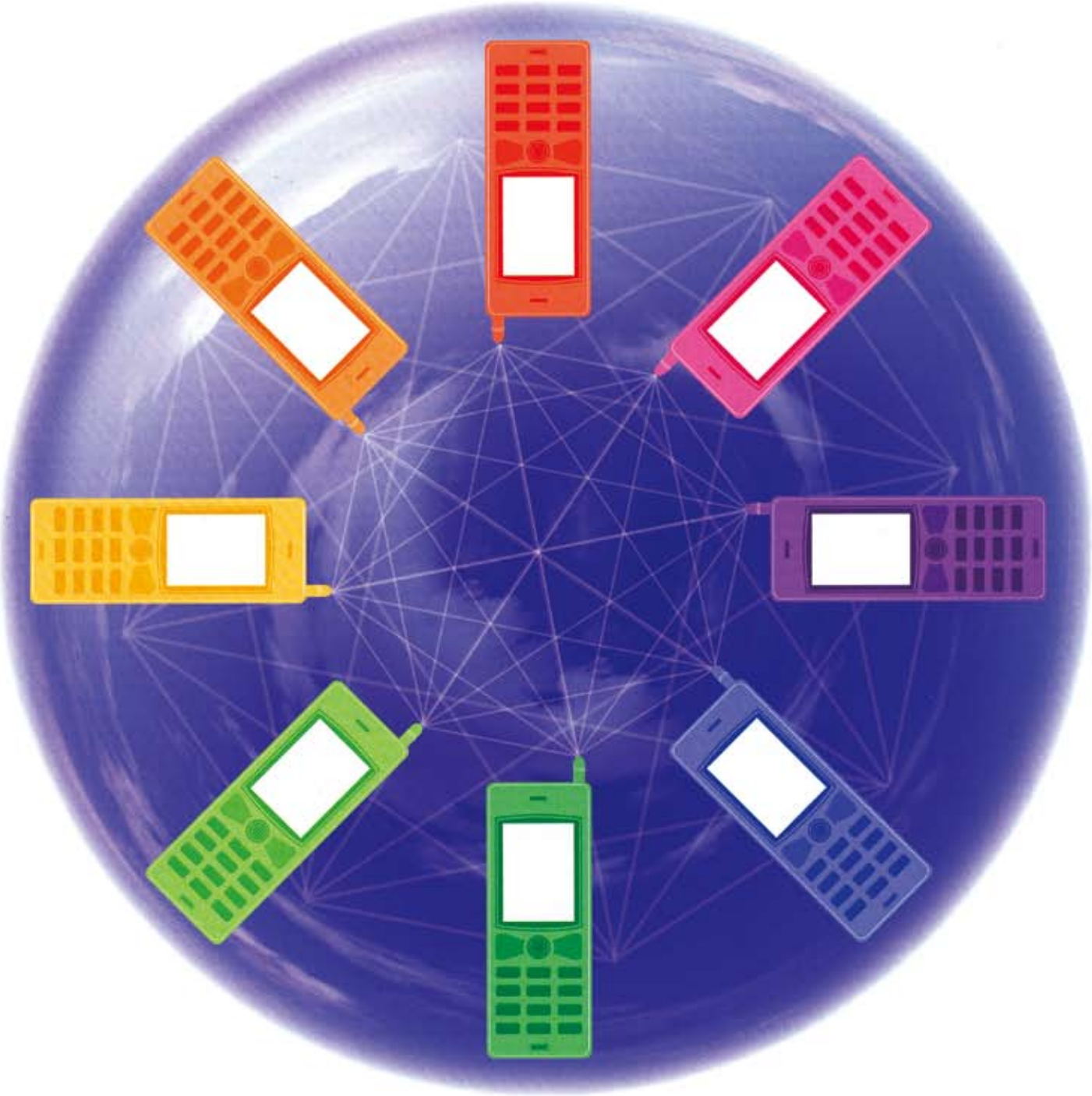
2010.3　静教組立教育研究所　所報 NO.139

「未来の教育を考える会」　第１回ミニシンポジウム報告書

ケータイと子どもたち

～ 今の子どもたちをどうとらえたらよいか ～



静岡県教職員組合立教育研究所

『私たちでつくる未来の教育』からミニシンポジウムへ
（第１回ミニシンポジウム「『ケータイ』と子どもたち」報告）

2009年３月、静教組立教育研究所「未来の教育を考える会」は冊子『私たちでつくる未来の教育』において、教育の目的や理念、理想とする未来の学校、地域・保護者と学校の関わり、生き生きとした学びをつくる教職員の役割などについて総括的な提言を行った。総括的な提言という性格上理念的なものが中心となり、具体的な課題については取り上げることができなかった。

「未来の教育」を考える議論のなかで話題となった今日的な個々の課題については別に検討し、問題提起や提言として発信することとした。また、今日的な課題について考えるにあたっては、「未来の教育を考える会」のメンバーだけで行うのではなく、保護者や教職員の参加を求めるべきだとの考えで一致した。

教育研究所が静教組各支部や地域に出向き、ミニシンポジウムを行うことによって保護者や教職員の参加を求め、そこで話し合われたことを『研究所所報』として発信することを考えた。ミニシンポジウムへの参加を通して、研究所の活動について組合員の方々や保護者にも知っていただけるのではないかという期待もある。

ミニシンポジウムの運営にあたっては当該の支部や地区には相当な負担をかけることになるが、静教組支部代表者会で了解をいただき、2009年10月18日に東部地区で第１回ミニシンポジウムを開催することができた。

第１回ミニシンポジウムのテーマとして「『ケータイ』と子どもたち」を決めた。大人社会ではコミュニケーションツールとしてケータイが欠かせないものとなっていて、子どもたちも同じ空気を吸っている。

ケータイがいじめや交友関係など、生徒指導上問題視されていることを踏まえながら、子どもたちがケータイをどのように使っているのか、なぜケータイを使おうとするのかなどを把握し、ケータイとの上手な付き合い方について考えたいと思った。

教育研究所では調査部を中心に「子どもたちの人間関係づくり」に関する調査を行っている。ケータイがコミュニケーションや人間関係づくりにどのようにつながっているかについても知りたいところであった。

ミニシンポジウムには、メディア論を専攻しケータイやネット社会について活発な評論を行っている荻上チキさんを問題提起者として招くことができた。荻上さんからのケータイとネット社会に関する現状報告や問題提起をもとに意見交換をした。問題解決の具体的な筋道を明確にするまでには至らなかったが、ケータイ（ネット社会）について考えていくべき視点の整理ができたのではないだろうか。

ケータイのもつプラスの面が、子どもたちの人間関係を広げていくことを期待してミニシンポジウムの抄録をお届けする。

2010. 2

静岡県教職員組合立教育研究所「未来の教育を考える会」

基調提案者紹介

●荻上チキ（おぎうえ・ちき）

1981年生まれ。批評家、ブロガー。成城大学文芸学部卒業、東京大学大学院情報学環・学際情報学府修士課程修了。専門はメディア論、テクスト論。人文社会科学系を中心にネットで話題のニュースやトピックを紹介する人気サイト「トラカレ！」も主宰している。政治哲学、社会学、文学、芸術など幅広い議論を展開する思想メールマガジン「αシノドス」編集長も務める。おもな著書に『ウェブ炎上』（ちくま新書）、ネットいじめ（ＰＨＰ新書）、共著に『バックラッシュ！』（双風舎）がある。
サイト：トラカレ！（http://torakare.com/）
ブログ：荻上式ＢＬＯＧ（http://d.hatena.ne.jp/seijotcp/）

未来の教育を考える会　第１回ミニシンポジウム「『ケータイ』と子どもたち」
基調提案「ケータイというメディアとどうつき合うか」荻上チキ

休日にもかかわらずスーツの方が大勢で、ちょっとびびっています。荻上チキと申します。僕は1981年の生まれで、高校時代からケータイやポケベルといったメディアを使いながら学生時代を過ごしてきました。平成生まれの子どもたちを、子どもの頃からデジタルなツールに慣れている世代ということで「デジタルネイティブ」と呼ぶことがありますが、僕は彼ら「デジタルネイティブ」よりは、２～３歳ぐらい年上に当たるかと思います。71～76年生まれの「ウェブ第一世代」の方々がつくってきたネット空間の様々なサービスを、「ケータイ第一世代」の者として下の世代にできるだけ多く受け渡すことと、メディアを使うことに熟練する制度やリテラシーづくりに力を注いでいきたいと思っております。

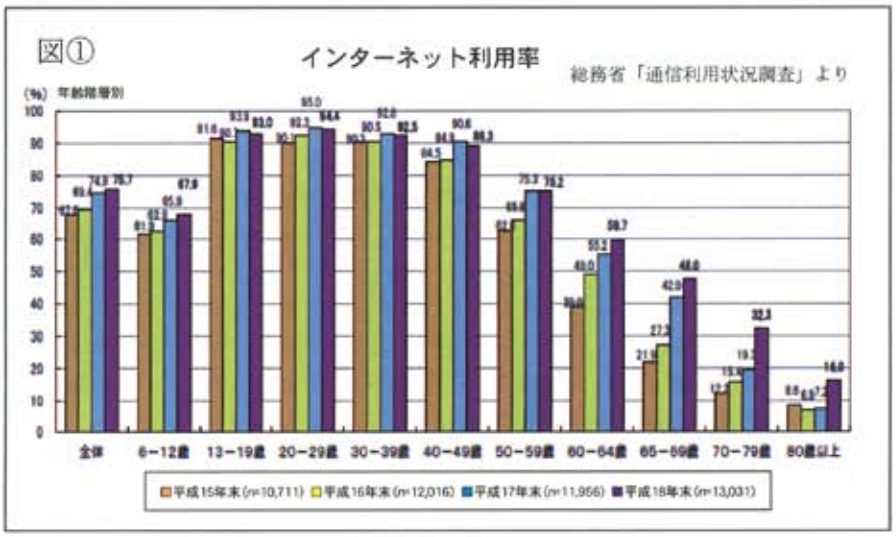
わたくし事で恐縮なんですが、インターネットやケータイ、ウェブに関する講演を何回かしていますが、ひとつの困難を感じています。それは、経済や文学など、既にイメージが共有されているものに比べ、ウェブに関する議論は非常に難しいな、ということです。例えば、今の若者のケータイについて講演する際、モバイル業界の第一線で働いているプランナーやプログラマーの方が話を聴きに来る一方で、右クリックもしたことのない教育関係者や保護者の人も同じ講演会の席に坐ったりしている。そういった人たちを同時に相手にしながら話すというのはなかなか難しく、こちらが伝えたいこと、具体的な政策提言ですとか、方法論の共有といったところまで、踏み込みにくいというようなことがあります。想定リテラシーの平準化というのが、未だ行われていないわけですね。

今回は「ケータイを持つ子どもたちとどう向き合っていくか」というテーマがあるので、先ず“今、子どもたちはインターネットやケータイの世界で、どのようなことをしているか”ということについて皆さんと共有し、“今後どのようなことが必要になるのか”ということについて話をしたいと思います。

＜ウェブ社会とは＞

現在は情報化社会であるとかウェブ社会であると言われていますが、そもそもウェブ社会とはなんぞや、ということについてざっとおさらいしたいと思います。実際にインターネットやケータイを使っているお子さまと触れている方ならごく当たり前のことかもしれませんが、まずは情報を共有するということで、話を進めます。

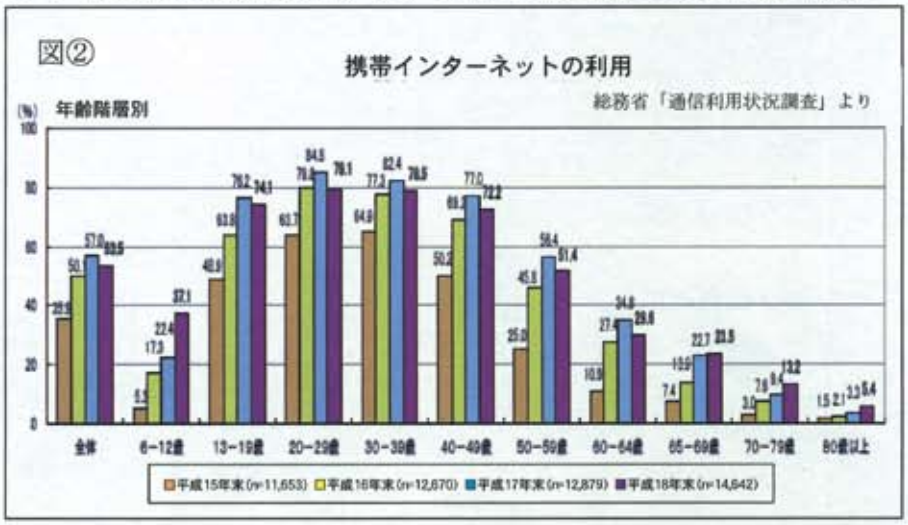
こちらは総務省の「通信利用状況調査」(図①)というものです。これは、平成15年から



18年末までのインターネット利用者数の変化を示しています。13歳から30代にかけては、横ばいで大体９割の人がインターネットを経験しています。６歳から12歳といった若年層が若干伸びを示しています。50代以上の中高年の利用率が伸びています。インターネットというものが年齢に関わらず使われるようになりつつあることをもって、ウェブ社会であるとか情報化社会になりつつあるということが言われています。

＜携帯電話・ケータイ＞

ケータイからのインターネットの利用についても同様な調査結果が出ています。携帯電話のことは、多くの子どもたちが片仮名で「ケータイ」と書きます。僕らも携帯電話と言わずに「ケータイ」と言ってることに象徴されるように、ただの電話ではないわけですね。ラジオも聞ける、音楽も聞ける、インターネットもできる、テレビも見られる、インターネット上で様々な人とつながることができるのでブログもできるし、ソーシャルネットワーキングサービスというようなものにも参加できる。また、プロフサイトといった自己紹介ツールとして使われたりもする。赤外線通信を使えば、初めて会った人でも電話番号を始め、写真や住所などを送ることができるので、名刺代わりに使われたりするわけです。定期券代わりにピッとやって電車に乗ったり、買い物の支払いもできる。今は、ケータイというのは、持ち運べるものであれば何でもそれ一つで済ませたいというアイコンになっているわけです。「今後ケータイに欲しい機能は何か」という調査をやると、運転免許証、家の鍵、テレビのリモコン、保険証、身分証明書、といったことが挙がってきます。なんでも一つで済ませることのできる、人にとって最適なパートナーメディアたらんとしようとするのが、今のケータイだというわけですね。



インターネットの利用については、ジェネレーションギャップがはっきりとあることが分かるかと思います(図②)。例えば13歳から30代ぐらいまでですと、６割から８割ぐらいが、ケータイからインターネット検索などを使っている。それ以上の方になると、インターネットやメールのやりとりなどの利用がぐっと減ります。こうした状況が、学校でケータイについての教育をやろうという時に大きなネックになります。つまり、ある年齢層以上の方々は、「ケータイ＝インターネットを使えるツール」という認識をあまりもっておらず、もっていたとしても自分たちがあまりそういった使い方をしていないので、具体的にどういったアドバイスや授業をすればいいのかよく分からない、というのが現状です。

<ウェブ社会のもたらした３つのもの>

もう少し、ウェブ社会のもたらしたものは何か、という話を続けたいと思います。ウェブ社会になって様々な状況が変化したと言われています。「これからはネット社会なんだから、ビジネスをばりばりやっていこう」「新しい人材発掘をしようじゃないか」といったことが希望的に語られることもあります。その一方で、マスメディアなどを中心に「子どもたちがケータイやインターネットによって犯罪に巻き込まれてしまう」「巻き込まれるだけじゃなく、加害者になってしまう」「買い物をしすぎてしまうのではないか」、ということを懸念する声も出ています。

インターネットやケータイが登場したことによる希望的言説と悲観的言説というのは、３つのウェブの特徴に対して言及されるものです。

①インターネットが登場することによって、今まで以上に人と人とが、人と物とが、人と情報とが、つながるようになってきた。

②つながっていったネットワークそのものが可視化した。つながりが目に見えるようになった。

③可視化された情報が蓄積されていくようになった。

ひとつ例を挙げます。ジャニーズが好きな女の子が静岡県に住んでいたとします。たまたま自分の通っていた学校では、ジャニーズファンは自分だけで自分以外はエグザイルファンだったとする。学校ではジャニーズについて語り合える友だちというのはいないわけですね。しかし、インターネットをつなげば、静岡県だけじゃなくて、東京に住んでいる人とか、北海道に住んでいる人とも、ジャニーズファンどうしのつながりが確保できるわけです。加えて、東京のファンたちがコミュニケーションしている様子も見ることができる。コンサートが今どこで行われているかといった情報や、今までライブ会場まで足を運ばないと見えなかったコンサートの曲順といったものまで見えてくるわけです。更に、情報は蓄積されるので、「2001年元旦のジャニーズライブの曲順」といったものも、簡単に検索して見つけることができます。買い物をするとか、人とつながるとか、ビジネスを円滑化するといったときに、インターネットの特徴を最大限に活用して、社会に適応していく人たちがいます。

一方で、ネガティブな現象というものもこの３つの特徴によってもたらされることがあります。例えば、サイバー犯罪。インターネット上で、名刺代わりのプロフィールサイトをつくっていた女の子がいたとしましょう。仮に静岡県在住ということにしておきます。その女の子のもとに、売買春をしたがっているような男の人からメールが行ったりする。以前なら、静岡に住んでいる女の子と他県からちょっと遊びにきた男が出会う機会というのは非常に少なかったわけですが、インターネットによってその可能性が拡大するわけです。加えて、プロフィールサイトなどを検索すると「出会いを求めている女の子」といったものが、ころころ見つかるわけです。そういった情報が目に見えてくるので、「自分もやってみようかな」と考える人や情報に感化される人が増えるんじゃないか、という懸念が出てくるんですね。

＜黒歴史＞

インターネット上でも頻繁に使われる俗語に「黒歴史」という言葉があるんです。振り返ると痛くて恥ずかしい体験のことですね。ギタリストに憧れて東京に上京して「俺、将来絶対ミュージシャンになってやる」って宣言したけれど、今ではちゃんと八百屋を継いでいるって人にとって、ミュージシャンになると宣言した過去というのは黒歴史なわけです。過去の情報が蓄積されていくと、子どもの頃の痛々しい失敗といったものもどんどん蓄積されていってしまう。人の悪口を書いたり書かれたり、あるいは好きな人の名前を書いたり書かれたり、ということも情報として蓄積される。一旦蓄積された情報というのはなかなか消えないので、いつまでも引きずってしまうことがあったりする。

＜ウェブ社会の住人の増加がもたらすもの＞

インターネットが普及する過程において、「インターネットが広がっていくとこんなにいいことがありますよ」と語っていた人たちがいました。それは主に、ナナイチ世代とかナナロク世代と言われるような、71年から76年ぐらいに生まれた、インターネットに対して親和的であり、かつ既存のマスメディアに就職しなかった人たちです。彼らは、これからはインターネットがジャーナリズムになっていくし、様々な社会発信のツールになるという発言をしていました。実際、子どもたち、お年寄り、外国の人などいろいろな人がウェブ社会に参加してくると、想定していなかった様々な問題が出てきました。

誰もがインターネットにつながる社会になると、インターネットに未成熟な人たちも簡単に入っていきます。すると、詐欺サイトなどを見破ることができない人が増えたり、犯罪に巻き込まれる人が増えてくるといったことが起きます。また、すべてをつなげていくというインターネットは、予期せぬコミュニケーションを生むことにもなります。特定の人に対する悪口「あの学校の先生ってちょっと…」などがネット上に書かれてしまうことがあります。それを読んだ本人が傷ついたり、ショックで職場に来れなくなってしまったり、訴訟に発展したり、といったことも起きます。

ウェブ社会になったことによって、様々な功罪が出てきます。特に罪の部分についての対処が必要なのではないかというような問題意識が、徐々に出てきたというのが現状ではないでしょうか。

図③

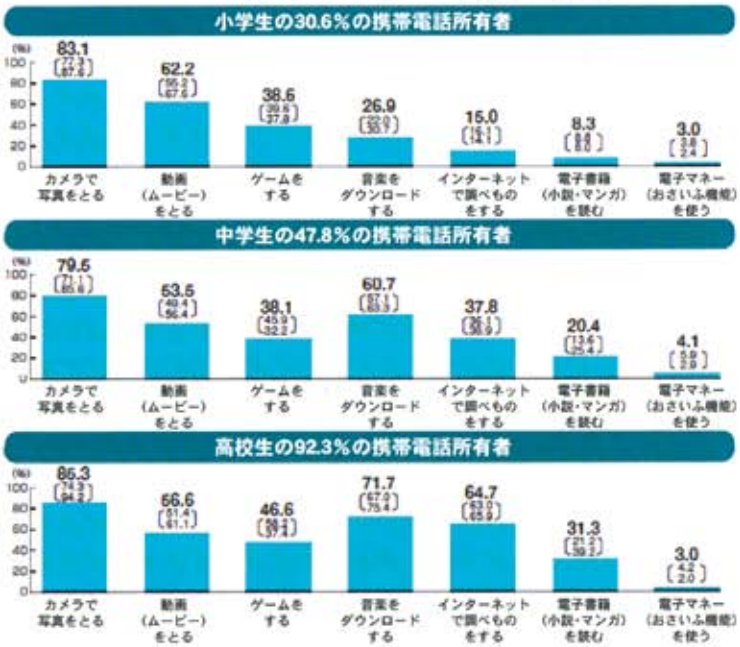
※ベネッセ「子どものICT利用実態調査」

＜子どもたちのケータイの利用＞

次に、子どもたちはどのようにケータイを利用しているのか、ということを踏まえながら「子どもとケータイの問題」に向き合う必要があると思います。子どものケータイ利用の動向について、資料(図③)を使っ

て確認します。これは、小学生の２年生から高校２年生までの、インターネット機能がついているケータイの利用状況についての調査結果ですが、小学６年生で３割、中学３年生で５～６割、高校３年生になると９割ぐらいが利用しています。義務教育までで考えてみると、大体半分以上がケータイを使ったコミュニケーションに参加していることになります。

図④　※ベネッセ「子どものICT利用実態調査」

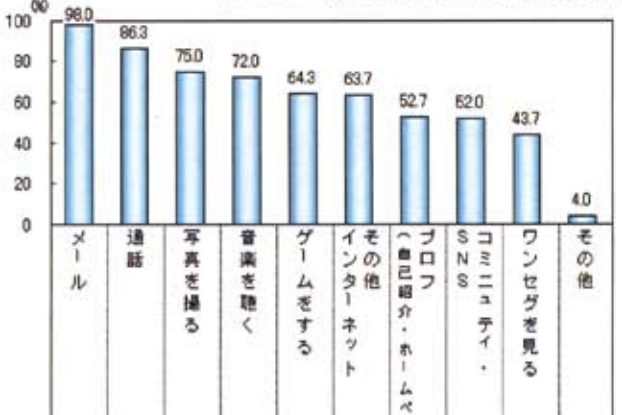


ケータイでどんなサービスを利用しているのかということを追った図がこれ(図④)です。カメラで写真やムービーを撮る、ゲームをする、という順になっています。注目してほしいのは、「インターネットで調べものをする」っていうところです。小学生ではケータイからインターネットを使って調べる人は１割から２割程度なのに対し、中学高校となると３割、６割というふうに増えていきます。ケータイから検索するのと、パソコンでするのとでは違いがあります。ケータイというのは個人の身体に近いメディアであって、他人が、具体的には親ですが、その検索履歴を見るということがなかなか難しいということがあります。

さらに、細かく見ていきましょう。こちら(図⑤)は、マクロミルという調査会社の行っている高校生のケータイ事情に関する調査です。メールが98%、通話が86%、メールのほうが通話より多いんですね。電話をしない日があっても、メールをしない日はあまりない。今の子どもに限らず20代～30代ぐらいまではそうだと思います。僕もそうですし。メールのほうが電話より、色々と気楽なんです。その他は、写真、音楽、ゲーム、インターネット、そしてプロフです。最近はプロフと言わずにホムペと言ったり、あるいはリアルと呼んでる人もいる。プロフを使っている人たちが５割程度いる。男女別に見ると女子高生の７割に対し男子高生は３割ぐらいがプロフをやっている。コミュニティサイトなどをやっているのも女子のほうが多い。男子はゲームをやったり、映画とか動画とか音楽を聴いたりしています。女子が“関係”にいくのに対し、男子

図⑤　高校生の携帯電話の使い方

マクロミル「高校生の携帯事情に関する調査」より



		メール	通話	写真を撮る	音楽を聴く	ゲームをする	その他インターネット	プロフ（自己紹介・ホームページ）	SNS コミュニティ・	ワンセグを見る	その他
全体(n=300)		98.0	86.3	75.0	72.0	64.3	63.7	52.7	52.0	43.7	4.0
性別	男性(n=150)	96.0	83.3	67.3	68.0	73.3	69.3	34.7	42.0	46.7	4.0
	女性(n=150)	100.0	89.3	82.7	76.0	55.3	58.0	70.7	62.0	40.7	4.0

は“もの”にいく。“もの”といっても、その先にはデコメなどを友だちと交換したり、音楽でこれいいよねって言い合ったり、“関係”につながっていくものもあります。次は、子どもたちが使っているケータイについて、ざっくりとおさらいしていきたいと思います。

<子どもたちが利用しているケータイのサービス…デコメ、プロフ、リアル>

まずはデコメと言われるデコレーションメールです。

ここでは基本的なもの、実際の中高生ならほとんど知っているようなサービスについて説明します。デコメというのは、普通にメールで文章を送るのではなく、例えば年賀状やバレンタインなど、季節に合わせたケータイに最適化された絵はがきのようなものだと思ってください。例えばチカチカ光る「ハッピーバースデー」という画像に「なおこだよ　お誕生日おめでとう　これからも仲良くしてね♡」といったメッセージを自由に入れることができる。子どもたちがインターネットで一番よく利用するサイトというのは、音楽のダウンロードサイトなんですけれども、その次に利用するのが、デコメをダウンロードできるサイトなんです。

けんかして「ごめんね」って謝ったら「もういいよ」って５文字が返ってきた。これ、結構悩むわけですね。俺のことはもういいのか、それとも許してくれたのかどっちなんだろうと。許してくれたにしてもドライな感じなのか、ハートフルな感じなのかっていうのは分かりにくい。そこを絵文字とかデコメなどで説明するわけです。デコメを送り合うことで、関係性のメンテナンスが行なわれます。子どもたちには「このデコメおもしろくない？」「これ好きだよね」みたいな感じで話のネタになっていく、こういったネタメールが毎日配信され更新されていくデコメサイトが人気で、多くの子どもたちは「お気に入り」にデコメサイトを２・３個は登録しているんじゃないでしょうか。もちろんコミュニケーションする友だちがいない人はデコメも使わないんですけれども。

次は、プロフです。これはもうテレビなどでさんざん報道されています。テレビで報道されるのは大体、犯罪に巻き込まれたとか、プロフがきっかけなって殺人とか暴力沙汰に発展したとか、事件がらみです。そういったものはイレギュラーなケースで、プロフサイトは多くの場合、健全に使われています。

プロフには、大体100とか50ぐらいの質問項目があります。その質問項目に答えを入力していくと、その人のキャラクターがなんとなく分かるようなページが１枚できるというわけです。最近の傾向としては、画像を掲載している人は減ってきています。画像を掲載するときにはパスワードでロックする人が多い。プロフサイトを使う人は、不特定多数と出会いたい人と、「未特定多数」の人とつながりたいと考えている人がいると考えてください。未特定多数というのは私が使っている言葉ですが、ジャニーズファンを例にとると、いまだ出会ってないから特定はされていないけれど、ジャニーズについて語り合える「未特定」人を指します。多くの人がそうで、「不特定多数」と出会いたいとは思っておらず、「まだ特定されていないけれど、特定の圏域の人」とつながりたがる。狭い中で未特定多数の人と出会いたいと思っている人は、メールでパスワードを教えて「これから見てね」っていう感じで連絡を取り合っています。こういったプロフサイトは、自己紹介だけじゃなく「ゲストブック」というか、「足あと帳」と呼ばれるようなものをページに用意して

あります。このページを見た人たちが、「プロフサイト見たよ」って書き込めるページを用意しておくと、そのことによって、簡単な交流の場ができます。時によっては「ゲストブック」や「足あと帳」が買春などの市場になったり、いじめの舞台になったりするということもありますが、全体としては少ない。

プロフ自体は特に問題はないのですが、何かと組み合わさったときに、更なるヒートアップの原因になったりすることがあります。最近、Yahoo!オークションか何かで、ネットで手に入れた情報に値段をつけて転売していた高校生のことが話題になりました。その高校生がたまたまプロフをやっていた。そこに割と詳しいことが書かれていたので、その高校生がどこの高校に行っているのかということが特定されました。そうすると、ネット住民たちは「特定できたか。よーし、潰してやれ」ということで、学校や家に行って写真を撮って、ウェブ上でリンチめいたことをしたりするわけです。プロフサイトに個人情報が書いてあったということに、ネットで得た情報を転売したというプラスアルファが加わって大きなトラブルになりました。

リアル。これはプロフサイトとちょっと似ているんですけれども、ここ２・３年、一部の若者ユーザーたちは「リアル」と呼ばれるようなサービスを利用しています。20代30代ぐらいの方で、パソコンに馴染みのある方がもしこの中にいれば、Twitterというサービスをご存じだと思います。リアルはTwitterの子ども版だと言われています。プロフというのは、１回書いたら１カ月くらいはそのまま残しておくのですが、リアルというのは、今何しているのかという実況報告を常に書き続けていくというサイトです。リアルタイムということになります。こうしたサイトにはコメント欄というものがついていて、例えば「カレーを食べている今」と書いて写真を載せたりすると、それを見た人が「おいしそう」みたいな感じでコメントをしていくわけです。メールに似ていますが、もうちょっと多い、４～５人くらいの自分のリアルを見てくれている友だちに向けて「今このテレビ見てる、おもしろいよ」って言うと、「じゃああたしも見る」みたいな感じで、コメント欄に返事が返ってくるようになっています。

＜学校裏サイト、学校非公式サイト＞

学校裏サイトは、学校非公式サイトや学校勝手サイトという呼び方もあります。これは、「掲示板」を使ったサービスになります。

例えば「○○高校の生徒集まれ」といった掲示板を作ると、その掲示板のことが口コミで広がっていきます。「この指とまれ」と言ったリーダーを中心に仲良しの10人ぐらいが同じサイトに入って、和気藹々といろんな議論をしたりするわけです。

地域が広くて匿名性が高い学校裏サイトというのは荒れやすいという危険性をもっています。一方、７・８人ぐらいの人たちでつくっているクラス裏サイトというか、クラス勝手サイトなどは、なかなか荒れにくい。というのは、学校裏サイトの多くは、口コミで広がるという話をしました。書き込みは匿名で書かれていても、やっている当人どうしはわりと誰が書いているのか分かっていること多いのです。学校でやっているコミュニケーションの延長線上のようなものなので、中身が荒れてしまうとお互いの関係がぎすぎすして終わってしまう。だから、いつまでもつながることができる「しりとり」や「マジカルバ

ナナ」「今何してるの」のようなものに人気が集まったりするんです。

学校裏サイトについては詳しい分析を『ネットいじめ』(PHP新書)でしたので、具体的な対策についてはそちらを読んでください。ひとつ言えるのは、子どもたちだって楽しくサイトを使いたいので、罵倒ばかりのサイトにすることは本位ではなく、様々な工夫がそこでは行われている、ということです。

<ゲームサイト>

ゲームサイトも人気があります。グリーとかモバゲータウンなどです。ただゲームができるだけじゃなくて、ソーシャルネットサービスというか、友だちとつながることができる機能が付いているものもあります。ゲームサイトを見ながら同時にコミュニケーションすることを楽しむというサイトになっています。先程紹介した「クラス勝手サイト」は、モバゲータウンの中にありました。こうしたゲームサイトの中の友だちどうしでつくるコミュニティページというのは、パスワードをかけ特定の人しか入れないようにしたり、削除がしやすくなったりしているので、ほとんどが人の悪口などひとつもない健全なサイトになっていると思います。

<コミュニケーションのトラブルの分類と対処>

ここまでいろいろなサービスを紹介しました。すべてに共通しているのは、子どもたちはウェブサービスを使って、コンテンツ消費ではなく、「コミュニケーション消費」をしているということです。そして、コミュニケーションには必ずノイズが入ってきます。例えば、伝達ミスであるとか、別の人に聞かれるとか、誤解とか、言葉にとげがあってけんかになってしまうとか。そこで、コミュニケーションをすることによって起こるトラブルの分類と対処について考えてみたいと思います。「インターネット上で多くのトラブルが起こっている」ということは、過剰なほど報道されてます。これは(図⑥)トラブルの種類を分類したものです。ネット上のトラブルは２つの視点から４つに分けられます。１つ目

図⑥

の視点は、オフラインに起因するトラブルとオンラインに起因するトラブルです。オフラインというのはネット上ではなく、教室や学校、地域などの生活空間で生じている問題ということです。オンラインというのはウェブ上で起こるような、あるいはウェブ上でのやりとりが原因で起こるトラブルということです。これを上下に書き分けてあります。２つ目の視点は、人間関係によるものかコンテンツによるものかということです。人間関係、コミュニケーション系のトラブルを左に、右にはコンテンツ系のトラブルですを書き分けています。

アダルトサイトをちょろっと見ちゃった。それによって「過剰な請求が来ちゃったどうしよう」というのは、ネットを利用していたことによるコンテンツ系のトラブルになるので、Ｃ群になりますね。それに対して、学校の友だちとメールをしているうちにけんかになったというケースは、オフライン、ローカルな共同体で起こっている人間関係のトラブルなのでＡ群に分類されます。

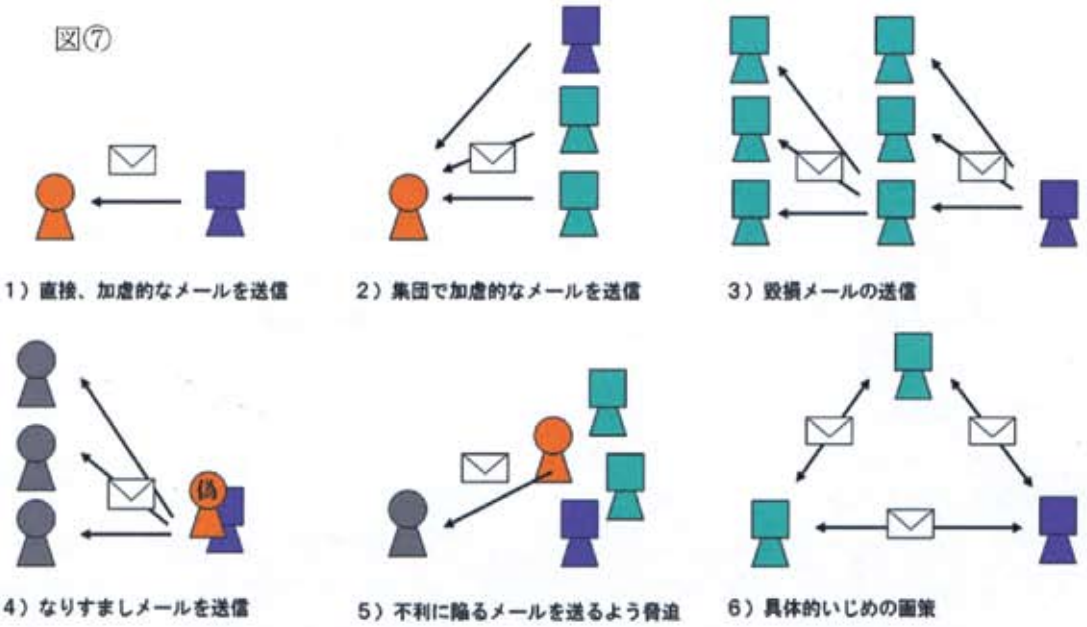
Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄそれぞれの群ごとの対処法が必要になるし、共通の対処法を考えることも可能です。右側の問題というのは技術的なことや規制など制度的なことで大体解決できます。例えば、ひと昔前にポップアップ広告というものがありました。ウェブサイトを見ていてリンクをクリックすると、「ぽっ」とやたらギラギラした小さなウィンドウが出てきて、そこがアダルトサイトへの入口だったりする。閉じても閉じても同じ広告がぽんぽん出てきてしまう。でも、最近はこの手のポップアップ広告はほとんど見なくなっています。なぜなら、例えば多くの人たちがウェブサイトを見るときに使っている、Internet Explorerというブラウザでは、ポップアップ広告が出てくると、自動的に警告が表示されて「このリンクを開きますか」ってワンクッションおいてくれる。それで、多くの人は「あ、これは別に開かなくていいや」と判断してトラブルに巻き込まれることがなくなる。チェーンメールについても、メール配信サービスが送らないようにブロックするとか、あるいはケータイですと５人以上のユーザーに同時に送れないなどの制約をかけることによって、被害を防止できるようになっています。技術上の制約をかけることで、多くの人が被害にあうことを避けられるわけですね。

一方、左側のコミュニケーション系のトラブルは、技術的な問題だけでは解決しがたいものです。技術的なところで解決しようとすると、大雑把なものにしかなりません。「ネットいじめをなくそう、なくすためにケータイを使わせないようにしましょう」というのがその典型例です。「ケータイを使わなければネットいじめしなくていいじゃん」確かにそうなんですけど。ネット上でコミュニケーションのトラブルをなくすには、ネットを閉じればいい、と言っても不可能です。ケータイも同じことが言えます。左側の人間関係に起因するトラブル、特にオフラインで起こるトラブルに関しては、人的な解決策というものがいつまでも、おそらく100年経っても、求められ続けていくでしょう。

＜ネットいじめとその対策について＞

ネットいじめと学校勝手サイトの裏側について、もう少しだけ解説を加えていきたいと思います。ネットいじめの主なパターンというのは、ここ(図⑦)に表示している６つのパターンになります。

図⑦



1）直接、加虐的なメールを送信　2）集団で加虐的なメールを送信　3）毀損メールの送信

4）なりすましメールを送信　5）不利に陥るメールを送るよう脅迫　6）具体的いじめの画策

いじめとは・・・「社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、かつ集合性の力を当事者が体験するようなしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与」（内藤朝雄）

ネットいじめとは・・・「ネット上のいじめ」ではなく「ネットを利用したいじめ」

①直接加虐的なメールを送信する。明日から学校くるな」とか、「死ね」とか、あるいは「ちょっと走ってアンパン買ってこい」とか、最近アンパン買ってこいなんてあんまり言いませんね。まあ「ファミチキ買ってこい」とか、何でもいいんですが。

②集団で加虐的なメールを送信する。「いっせいのせ」で、同時に同じようなメールを送る。陰湿な例だと、１人目が「ぶ」っていう一文字だけのメールを送る。２人目が「さ」って送って、３人目が「い」って送って、4人目が「く」って送って、つなげると「ぶさいく」になる。

③昔からある古典的ないじめ、授業中に本人を抜かしてメモを回していくのに似ている。「あいつのことをハブにしようぜ」メモを回すかわりにネットを使うというケース。

④なりすましメールを送る。誰からメールがきたのか表示をされている部分をヘッダー情報っていうんですが、ネットに詳しい人だとヘッダー情報を書き換えることができます。それを書き換えて別の人間になりすましてメールを送る。偽の告白メールを送ったり、いじめらている子が心の拠り所にしている友だちとの仲を裂くようなメールを送ったりする。

⑤不利に陥るようなメールを送信することを脅迫する。例えば、「キモイ」と言われている子に、告白メールを送ることを強制する。

⑥具体的ないじめを画策する。

ネットいじめの対策なんですが、基本的には、これまでのいじめに対することと変わりません。テレビなどの報道では「ネットいじめはいじめる側の特定がしにくい」「どこまでもいじめに追いかけられてしまうので今まで以上に大変だ」と伝えられていますが、僕

は逆だと思っています。つまり、手書きのメモを回した場合、筆跡鑑定をしない限り誰がそれを書いたのか特定できないわけです。学校の先生は「私はテストと名前とかを見ているのでみんなの筆跡は大体分かっているから、大体誰だか分かっているんだけど、こっそりあとでおいで」みたいな、ブラフをかけて特定しようとしましたね。メールだと送信ログが残っているので、ネットいじめに関しては、今まで以上にいじめた側の人間を特定がしやすくなってます。ただ、特定する対象が学校の中だけにとどまらないということがあります。今までですと、生徒を呼び出したり保護者を呼び出したりして対策をすることができたんですが、ケータイの場合は学校空間を飛び越えてしまっているので、警察なり弁護士なり、あるいはサーバ会社とかメール会社に、問い合わせをしなくてはならないという手間がかかります。

ネットいじめ対策としては、その手間をより簡単にすることです。業界団体が学校から問い合わせがあったら、こういう情報を渡して、警察にはこう対応して、というマニュアルを整備し、連携を強めておく必要があると思います。これは制度的な解決に関してです。いじめの発生そのものを防ぐ努力はもちろん必要です。

学校勝手サイト(学校裏サイト)は、裏化する、荒れる、いじめとか悪口の舞台になることがよくあります。匿名ではない掲示板、つまりユーザー登録しなくてはならない、かなり認証性の高いサイトでも、特定の個人の名前を出して「〇〇嫌い」「え、誰のこと？もしかしてＳ？　それともＩ？」「両方だよ（笑）」「ああ、二人ともウザイよね」という感じで、盛り上がっていくことがあります。名誉毀損の対応をしたり、あるいはサーバ会社に削除対応を求めることができます。技術的な面に関しては先程言った、ネットいじめの対応と同じようなもので可能なんですが、問題なのは人間関係のトラブルが根底にあるということです。つまり、書き込みを削除するかしないかということは副次的な問題であって、問題の解決には、そこに存在している人間関係に梃入れしなくてはならないということです。ネットいじめの多くは、もともとあったものが、今まで以上に目に見えるようになったということなんです。

若者や子どもたちが使っているウェブサービス、コミュニケーションサービスと、それによって生じるトラブルについてざっくりと紹介してきました。ケータイ上であるいはサイバースペースで起こったトラブルに対する解決策にはどういったものがあるかというものを確認しておきたいと思います。

１つめは、技術的解決策というのももちろんあります。コミュニケーション系のトラブルに対して、技術系の解決策を提示することによってトラブルが減った例もあります。例えば、先程から紹介しているモバゲータウンという例なんですけれども、モバゲータウンというサイトには、各ページに必ず、「通報する」とか「表示する／しない」というコマンドがついています。ちょっと危ない発言やちょっといけない発言をしている人たちをユーザーが見つけ、それを不快だと思えば、そのボタンを押せば、管理会社のほうに通報され「適切か、適切じゃないか」が判断されるようになっている。コミュニケーションで生じるトラブルを、わりとオートマティックに解決するような仕組みを作ろうとしているわけです。YouTubeで動画を見たことがある人は多いと思いますが、コメント欄にボタンがついていて、拒否のボタンを押した人が多いと、その人が書いているコメントは最初は表

示されないんです。人々が欲しがっている情報というものを半自動的に峻別する技術によって、コミュニケーションのトラブルを減らそうとしています。

２つめには啓発的解決策で、これは例えばモラルを教えるとか、こういった犯罪があるから気をつけろとか、使い方とかを教えるっていうことです。僕は、啓発的解決策はできる限り小さくあってほしいと思ってきました。というか、１億人全員が、同じようにリテラシーを共有する社会などいつまで待っても来ないですし、時間が掛かる割には効果が弱いんです。どうしても情報能力の差が出てしまいます。情報能力が弱い人を救うには、技術的な解決策とこの後で触れる制度的な解決策が必要になるだろうと思います。もちろん啓発的解決策でできる限りのことは、やったほうがいいなと思います。

最後に制度的解決策ということですが、啓発的解決策を導入することができるのも親とか学校の先生とかに限られています。もうちょっと広い、教育委員会とか、各自治体の条例とか、県や国が具体的な方法を提示することが必要ではないでしょうか。お金を使って誰も読まないようなパンフレットをばら撒くより、トラブルに関する相談所などを充実させた方がいいと思います。トラブルの相談に対する電話での対応の仕方を整理したり、専門家による支援組織のようなものをつくったり、制度的なアプローチも同時に考える必要があると思うんです。

現場の教師の方だけで考えていると技術的解決策ってなかなか出にくいし、逆に、ウェブにめちゃくちゃ慣れてるプログラマーなどと話していると「啓発的解決策なんて別にいらないじゃないか」という声を聞くことがあります。確かに多くのプログラマーは誰にも教わったわけではなくて、自分で勝手にネットを学んできたような人たちだから。省庁の人と話していると、彼らはなぜか啓発的解決策に乗り気で、いろんなところでシンポジウムやりましょうみたいな話をよくされます。僕は、シンポジウムを使ってケータイリテラシーを上げるというのは、ほとんど効果がないと思うんです。省庁の人たちにはもうちょっとシステマティックな解決策を模索していただきたいなと思っています。

ローカルな人間関係づくりからのアプローチ、技術的なアプローチ、啓発的なアプローチの３つの方法を使って、トラブルに対してどのような対処が可能なのかということを今後議論していかなければならないと思っています。

具体的な提案というものは今回省きましたが、この後の、ディスカッションの中で、応答していければいいかなと思っております。